

我等の建設的運動

(労働運動の途上と目標の最後の一番)

沖島 哲二 郎

近代政治家なるものは口を開けば労働問題の解決を云々するが解決とは其文字の如く結末を告ぐるの意である然るに今漸くにして其聲を揚げ幾何程の訓練を経ずして如何にか左様に簡單に解決を見ることが出来やうか今後幾度かの變轉を展開してこそ是が解決を得るであらう。

社會民衆も政局のものも資本家も労働者の人格を認めることに理解を持たねばならぬ、殊に資本家は此機に際して工場施設の改善を圖り自ら進んで共に語るの概を有たねばならぬ。

現在の境遇に満足することの出来ない労働者は着々と其歩を進めて社會的位置の向上を圖らねばならぬ、たゞ其運動として過激なる運動は折角理解を得つゝある社會に對して反感を受くるの憂あるを以て注意を要する次第である。

現代の労働運動も婦人解放運動も好ましいことでは無いといふものもあるが風の吹く冬を經ねば花咲く春に遇へない、然し風の吹き方が激し過ぎると花咲く春を待たないで枝も枯れる幹が倒れる労働運動は如何に進むべきか。

労働者の向上運動としては遂に労働法案を完成して労働條件の改善を圖らねばならぬ、現在の協調主義は結構なことではあるがマー／＼といふ仲は到底萬足に運行するものでない。

借家法、借地法、住宅組合法の如きも經濟的地位を向上せしむる方策として悪いことでは無い、然し今一段を進めて教育の普及を圖つて品性の向上を促し、労働保險法を制定して生存の不安から脱せしめねばならぬ、是等の問題に就ては他の機會に詳述する、是からの運動は人間の運動であ